

第四章

専心と堅忍

「自然の資金なる」時を用ひ得る勤勉の人こそ富者なれ、砂に餅してつとめいそしみて、總てを集めんとする勤勉の人こそ富者なれ。アー・ア・ベナント

偉大な結果を得る方法に在る方

人生の最大功績が單純なる方法に依り、又普通の性質を使用することに
より得らるゝこと常なり。吾人の日常生活には注意あり必要あり職分ありて、最良の經驗を獲得する機會を充分に有せり。而して其失敗は却つて眞正の勞作者に向上の道に努力進捗せしむる便を與ふること大なり。人間幸福の路は確實なる善行の大路に沿うて走る、而して最も眞誠なる精神にて働く最も耐久なる人は常に最も成功するものなり。

幸運は勤勉の人に在る

「幸運を批難して盲目なりとなす人あり、然れども幸運は人間の如く盲目にはあらざるなり、實際生活を洞見する人は、幸運が常に勤勉者に附隨することを知るべし。恰も順風、穩波の最良の航海者に附隨するがごとし、最高な

天才とは忍耐力のこ

ニウトンとケプレン

る學問知識の研鑒に於ても、常識、注意、専心、堅忍等の如き普通の性質の方が却つて必要なり。天才は必ずしも必要にあらず、最高なる天才者は右の如き普通性質の功用を賤まざるものなり。最大の偉人は天才の力を信ずること最も少ない人の中より出でたり。而して普通の成功者と等しく、世智に長じ堅忍に富みたり。中には天才を以て常識の強められたるものと見做せし人もあり、有名な教育者にして「大學の長なりし某は、天才を以て努力をなす力と認めたり。ジョン・フオスターは天才とは人が自身心中の活火を燃やす力なり」と曰へり。ニュートンは「天才とは忍耐力のことなり」と曰ふ。ニュートンは疑もなく偉大なる心志を有する人、而も或る人彼が如何なる方法によりて其大發見をなしたるかを問ひしに、彼謙遜して答ふらく「常に是等について熱慮をめぐらすことによりて」と。又或る時其研學の方法を語りしことあり、曰く「余は常に其問題を心に留め置くなり、而して最初の曙光が少しづつ次第に開けて、遂に充分明白なる光に至るまで待つ」と。彼が其大名を得たるは専ら勤勉、専心、堅忍に依りてなり。是れ、ニウトン以外の人に

於ても同様なり、彼研學に汲々として怠ることなし、少しく倦怠を感ずるときは、其問題の研究を棄て、他の研究に移り、以て休養に代へたり、彼博士ベントレーに下の如く曰ひしことあり、『余若し公益の爲めに盡くす所ありたりとせば、それは唯勤勉と耐久の思考とに依るなり』と、同様に他の大理學者ケプレルも、亦自身の研學と進歩とについて語りて曰く、『サー・デルの詩句にもある如く、余是等の問題に勤勉思ひを凝らすに益々進んで考慮をめぐらさんとの念生じたり、而して遂に自ら我全心の精力を問題の上に注ぎて考慮するに及びたり』と。

非常なる功績が、單に勤勉堅忍に依りて得らるゝこと屢々なるにより、卓越の士にして、世人が天才を以て特別なる天賦となすを疑ふもの多し、さればヴォルテアは曰く『普通の人と天才の人とを別つ分界線は、甚だ微かなるものなり』と、ベッカリアは、人は皆詩人たり雄辯家たり得べしとの説をさへ有し、又レーノルツは人々皆畫家たり彫刻家たり得べしと曰へり、人は皆天才となり得べき等しき傾向を有す、甲が智性を支配する法則に従ひて成

就し得べき事は、乙も亦同一の法則に従ひて之に従事せば成就し得べし、是れロック、ヘルヴェチウス、ディデロの信じ居たる所なり、然りと雖も、吾人が一面、勤勞が驚くべき成功を來すこと、最も卓越せる天才者は、常に最も剛毅不撓なる勞作者の中にあることを認むると同時に、又他面、天稟の頭腦と心情とを有せずしては、如何に勤勞を積むこと宜しきに適ふとも、シエクスピアーの如き、ニウトンの如き、ベートーヴェンの如き、ミカエル・アンジェロの如き偉人となること能はざることも、極めて明瞭なりと謂ふべきなり。

化學者タルトンは、人が己を天才なりと言ふを排して、其成就したる事には、只勤勉と蓄積とに依ると曰へり、デヨン・ハンターは、自身について語りて曰く『我心は蜂巢の如し、嘈騒と混亂とに充つるが如しと雖も、中自ら充分の秩序あり整齊あり、而して食物は自然の精選の貯蓄中より、不斷の勤勉に依りて集められて之に充てり』と、吾人偉人の傳記を瞥見するときは、最も卓絶せる發明家、美術家、思想家、其他各種の勞作者等が、重もに其不屈不撓の勤勉專心に依りて成功したるなることを知る、彼等は万事を黄金に化したる人、時

反復の
力を
生ず

さへも之を黄金化したり。デズレリーは、斯くの如き意見を有せり。『成功の秘訣は他なし。我が達せんとする事業を我が支配することなり。而して、かかる支配は、唯専心と研究とを續くることによりて得らる』と。然るが故に、最も世界を動かしたる人は、世人により確かに天才と稱せらるゝ人よりも、寧ろ強き普通の才能と不屈の堅忍とを有する人に多し。天性聰明の人よりも、寧ろ如何なる仕事にても己の仕事に勤勉精勵なりし人に多し。一寡婦穎脱の才ある其子の物事に不注意なるを歎じて曰く『悲しいかな、我子は持續の資質を有せず』と。かゝる敏捷の人と雖も、堅忍を缺くときは人生の競走に於て遲鈍なりとも勤勉する人に追ひ越さるべし。伊太利の諺にこれあり。『徐々とし、て歩む人は長く行き遠く行く』と。

故に、勞作的性質を能く養成することは、吾人の目的とすべき一大事なり。既に此性質にして充分養成せられんか、人生の競走は比較的容易となるべし。吾人は繰返し又繰返すべきなり。勞作の結果は万事に容易となるものなり。極めて簡單なる技術と雖も、反復することなくしては成就せず。如何なる

パサ
ー
ロ
記憶力
を
生ず
成
績
を
上
げ
る
話
義
記

熟練は
實
行
に
依
り
て
來
る

困難の業か反復に依りて成就せられざる。反復は最難の事をも成就せしむるものなり。サイロバート、ビル、普通の材を有するに過ぎざりしが、之を修養して著しき力となし、以て英國上院の美花とまで稱せらるゝに至れり。是れ夙に訓練反復を努めしに因れり。ドレートン、メーナーにて小兒なりし時、父は彼をテーブルに登らしめて即席の談話をなさしむるを常とせり。又彼をして日曜日の説教の記憶せらるゝだけを反復せしむるを常とせり。最初は歩々しき進歩も見えざりしが、堅忍牢乎たりしかば、注意力増大して、遂に説教を殆ど一語の誤謬もなく暗誦し得るに至れり。後彼議會に於て政敵の辯論に直ちに續いて返答するの巧なること、殆ど比類なかりしが、而も彼がかゝる場合に表はせし正確なる大記憶力は、素とドレートンの寺院に於て父の訓練の下に養成せられたるものなりとは、誰人も想像せざる所なりき。

瑣細の事に於ても、耐久専心が力をなすこと大なるは、實に驚くべきなり。胡弓を彈ずるが如きは容易なることの如く見ゆ。されど如何なる長き勤勞を要するかよ。デアルデニ、一青年が胡弓を學ぶに幾許の時を要するかを問

ひしに答へて曰く、「一日に十二時間づゝ二十年を要す」と、貧賤なる舞踏人と雖も、名を揚ぐるには絶えざる勞苦の數年を、其利益なき仕事の爲めに用ひざるべからず、タル、ヨーニ、夕の舞踏の準備をなす時、父より峻嚴なる二時間の課業を受けし後、勞れはて、昏倒して、全く人事不省に陥り、衣服を脱がされ、海綿にて摩擦せられ、以て漸く蘇生するを常とせり。夕の輕快と跳躍とは、かゝる代價を拂ひて得らるゝなり。

さりながら、進歩の最良なるものは比較的遅きものなり。偉大なる結果は直ちに得らるべきものにあらず、吾人は人生に於ても普通の歩行の如く、一足づゝ徐々に進むことにて満足せざるべからず、ドメーターは「待つこと」を知るは成功の大秘訣なり」と曰へり。吾人は刈る前に先づ蒔かざるべからず。忍耐して前途の希望を期しつゝ、屢々長く待たざるべからず、待つに値する成果は往々にして最も遅く實るものなり。東洋の諺に曰く「時間と忍耐とは桑葉を變じて繻子となす」と。

然れども、忍びて待たんには、人は快活に働かざるべからず。快活は優等な

る勞作的性質にして、性格に大なる彈力艱難に耐ふる力を附與す。一僧正が「性情は基督教の十分の九なり」と言へりしが如く、寔に快活と勤勉とは、實際的智識の十分の九なり。快活と勤勉は是れ成功及び幸福の生命なり。精神なり。思ふに人生最高の快樂は、公明敏捷にして自覺を以て勞作することに存するならんか。精力、自信、其他の善良なる性質は、主として此勞作に據るものなり。シドニスミス、ヨーク州なるファストン・クレーの寺領の僧侶として働き居りし際、——彼は此職を以て己に適せりとは思はざりしと雖も——我、最上をなさんと、の決心、牢乎たるものありて、快活に職務に従ひたり。彼は曰ひき、「余は其職を好まんと決心しぬ、其職に我を適合せしめんと決心したり。是れ此職を己に適せずとなして不平を唱へ、罷められて廢物の如くならんよりは男らし」と。博士フック新しき勞作に入らんとて、リイズを去る時、かく曰へり「何處に在るとも余は神の思想に依りて、我手の爲すことを見出せしときは、力を盡くして之を爲すべし。余若し仕事を見出す能はずば、余は之を自ら造らんと」。

公益の爲めに勞作するものは、特に長く忍びて働かざるべからざるものなり。此間報酬又は結果の近く生ずる見込もあらば聊か慰むるに足るものすら無きこと屢々なり。時としては彼等の蒔きし種、冬雪の下に隠れ、春來りて芽出づるや、蒔手なる農夫は既に此世にあらざることあり。ローランド・ヒルは其大思想が生時の中に果を結びしを見たりと雖も、總ての公共的勞作者皆然るにあらざるなり。アダム・スミスは其長く働きたるグラスゴウの老朽汚埃の大學に一大社會的革進の種子を蒔き、又其著「富國論」の土臺を据えたり。然れども此著作が實際の効果を結ぶまでには七十年を要したり。而して其効果は未だ充分に集められざるなり。

人。一たび其希望を失はんか其損害大にして何物も之を償ふこと能はず。自己の人格一變するものなり。偉大なれども薄倖なりし一思想家は曰へり『余我希望を残らず失ふときは如何にして働き得べしや如何にして幸福なり得べしや』と傳道師カレは最も希望に富む勞作者なりしが故に最も快活勇敢なりき印度にありし時一日に其書記なる三人の印度人を全く疲勞

せしむることは敢て珍しからざりき而して此間己は倦怠を感ずるときは仕事を更へて休養としたり。カレは靴工の子なりしがカレの事業を助けたるものは大工の子なるワードと職工の子なるマーシャムなり。此三人の勤勞によりて一の壯麗なる大學校セラムボアーに建てられ十六の盛大なる説教所造られ聖書は十六種の國語に翻譯せられ英領印度に於ける有功なる道德的革命の種は蒔かれたり。カレは其出身の卑きことを少しも耻づることなかりき嘗て印度總督の宴會に出席せし時彼の向ひに一士官ありしが態と聞てえよがしの大聲にてカレが嘗て靴工たりしか否やを其隣人に問ひたり。カレ之を聽きて直ちに叫ぶらく「否」とよ。君靴修繕人たりしのみ」と。小兒の時彼の堅忍なりしことにつき世にも著しき一話あり。一日樹を攀ぢしに足を滑べらして墜落し其脚を傷けたり。彼爲めに數週間臥床に閉ぢ込められしが快復して杖の助なくして歩行し得るに至るや先づ第一に彼樹に攀づることをなしたりき。カレは其生涯の一大傳道事業のためにはかゝる不屈不撓の勇氣を有せしなり而して彼は高潔に剛氣に之を爲

したり、

「人の爲したる事は誰人も爲し得」とは、理學者ヤング博士の言なり。彼は如何なる艱難にても、之に當らんと決心せし時は、決して之を避けしことなし。是れ確かなる事實なり。傳ふる所によれば、彼が初めて馬に乗りし時同伴せしは、有名なウリーの銃獵家パークレー氏の孫なりしが、彼等の前に一人ありて、馬上のまゝ高き垣を越えたり。ヤングは之を真似んとせしに、落馬したり。一語をも發するなくして、彼は再び乗馬し、再び跳躍を試みたり。これも亦失敗なりき。されど彼は跳ね出されしと雖も、今度は辛うじて馬の首にとりつくを得たり。第三の試みに於て彼は成功し、無事に垣を乗り越えたり。

韃靼の人チムールが、困厄に際したる時、蜘蛛より堅忍の教訓を學びたる話は、人の能く知る所なり。米國の鳥類學者オーデューボンの逸話も亦面白し。是れ彼の自ら語りし所、曰く「余の創意より二百枚程の圖畫を描き置きしが、或る時一事起りて爲めに余は殆ど我鳥類學の研究を止めざるを得ざるに至らんとせり。余の之を語るは單に「熱心」——余は余の堅忍を熱心と呼ぶよ

り。他なきなり。——が、自然の研究をして、最も心沮喪する困難を打ち破らしむることの如何に大なるかを示さんとするに外ならず。余はケンタッキ一州のオハヨー河畔のヘンダーソン村に數年間住ひたることありしが、或る時用事の爲め、此村を去りてフィラデルフィアに往きたり。余は出發前、右圖畫を調べ、之を木製の箱の中に注意して收め、親類の一人に託して、之を損せざるやう吩咐た。余の不在は數ヶ月に亘れり、而して歸りて後數日間休養したる上、かの箱を求めたり。余は我實を得ることを如何に喜びし。箱は來りぬ、開かれぬ、されども讀者よ、思ひ見給へ、夫婦のノールウェー鼠は、此箱を占領し、紙を片々に切りて、其間に子を育てたり。此箱には一ヶ月以前には一千に近き鳥類の圖畫の入りにありしものを、我頭は忽ち熱火に燃えぬ。我全神經に影響することなくして、之に堪へんには、此火は餘りに熾なりき。余は幾夜も眠りぬ、茫然として夢中の如くに日を送りぬ。余の全身を通じて活力回復し、銃を執り手帳と鉛筆とを持ちて、恰も何物も起りしことなきが如く快活に森林を彷徨するに至りしは、此後なりき。余は前よりも勝りたる

圖書を描き得るを喜び、三年ならずして我箱は再び充つるに至りたり。」
ニウトンの小犬ダイアモンドが彼の机の上の火の附ける蠟燭を倒して、
書類を燃やし、爲めに多年苦心の研究が一瞬時にして無に終りたるは有名
なる話にして、茲に繰返す要なし。此損害がニウトンを悲ましめたるの大な
るや、彼はいたく其健康を害し、其理解力を減じたりと云ふ。之に似たる一事
がカファライルの『佛國革命』第一巻の原稿に起りたり。此原稿を文學の心得あ
る一隣人に閱讀せしめんために貸し與へたり。隣人誤つて之を客間の床に
置きたるまゝ忘れ居たり。數週間は過ぎぬ、印刷者の督促盛なりしかば、カ
ライルは原稿の返却を求めたり。彼隣人は之を搜索したり、而して遂に一日
下婢が原稿を一束の反古紙と思ひ誤りて臺所と客室との火を焚きつける
爲めに用ひたりしこと解りたり。かくの如きはカファライルが受取りたる返
事なりき。彼の感や果して如何なりしか。さりながら再び決然として稿を起
さんより他に致方もなし。彼は之に向ひ之を爲しぬ。此焼かれたる原稿の外
には、一片の原稿もなかりしかば、既に長き以前に忘れたる事實や思想や描

寫を記憶中より蒐集するの已むを得ざるに出でたり。最初書を作りしは快
樂の事業なりしが、再び之を書かんことは殆ど信じ難きほど苦惱慘痛のこ
となり。彼がかゝる境遇の下に堅忍不撓再び書を作りたるは、寔に世に稀な
る決意決行の一例と云ふべし。

有名なる發明家の生涯も、右と同様なる堅忍を示すものなり。デョージス
ティブソン、青年に語るときは其適切なる忠言を概説して、『余の爲したる
如く爲し給へ——堅忍なれ』と言ふを常としき。彼は、レーンヒルに於て、其汽
車蒸氣機關の發明に、全く成功を得るまでには、之が改良に約十五年勉むる
ことを要したり。ワットは其縮密蒸氣機關を完成するに約三十年を要した
り。されども右と同様なる著しき堅忍の例は、其他の科學、藝術、工業に於ても
多くこれあり。多分其最も興味あるものゝ一は、ニネヴェの大理石の古墳の
發掘と、此大理石に刻まれたる長く世に知られざりし楔形文字、若くは鋌頭
文字の發見とに關したるものならんか。此楔形文字は、古昔マセドニアが波
斯を征服せし後、全く世に隠れたる文字なり。

東印度商會に屬せる文字ある一義勇兵、波斯のケルマンシャーに滯留せしが、近邊に古き記念碑の上に奇妙なる楔形の文字の記されあるを發見したり。是等の記念碑は、甚だ古きものにて、其何の記念碑なるか、歴史上少しも明かならざるなり。彼が寫したる碑銘の中に、有名なるベヒスタンの岩に刻まれたるものあり。此岩は平原より一千七百呎の高さまで垂直に上れる一大巨巖にして、其下部凡そ三百呎の間は、バルシャ語、シリア語、アッシリア語の三國語を以て、同一の事を記しありたり。彼は世に知らるゝ言語と、知られざる言語とを比較し、世に遺れる言語と遺らざりし言語とを比較して、研究する所あり、稍々楔形文字の知識を得るに至り、又伊呂波をさへ造り得るに及べり。後にサー・ヘンリー・ローリンソン(サーは從男爵及び勳爵等に對する尊稱)と稱せられしローリンソン氏は、彼義勇兵の寫せる文字を英國に送りて學者の査定を求めたり。各大學の教授にして楔形文字について知れる者は一人もなかりき。唯り前東印度商會書記ノリスといふものあり、謙遜無名の人なりしが、此文字について研究する所ありしとにより、此寫字

を彼に送りたり。然るに彼は未だ、ベヒスタンの岩を見ざる者なるに、此寫字に誤のあることを發見したりき。彼の知識の正確なりしや以て知るべし。時にローリンソン、猶かの岩の近くに在りしが、其寫字と原物とを比較し、寫し誤りを發見して、ノリスの言ふ所の正しきを知りたり。而して益々専心比較研究するによりて、楔形文字の知識は著しく進みたりき。

然りと雖も、此二人の獨修者の知識を有効ならしめんには、更に第三者なる勞作者ありて、二人に其熟達を用ひんが爲めの材料を供せざるべからず。而してもと倫敦の一辯護士の書記たりしレーヤードこそ此第三者の任に當りたれ。一は義勇兵、一は印度商會書記、一は辯護士の書記なる此三人が、世に忘れられたる國語と世に埋没したるバビロン歴史の發見者たらんとは、誰人か豫期せし所ならんや。レーヤードは、齡僅に廿二の一青年、東洋に旅行して偶々ユーフラテス河の向ふ側の地方を通過せんとの志望を起しぬ。同行者は只一人、我身の保護を託するものは只二三の武器。而も武器よりも尙ほ勝れる其天性の快活と恭敬と武俠とを力と頼みて、野蠻の種族等が爭鬭

の間を通過して進み、而して多年の後、其旅費は比較的少きも、発見、搜索に對する火の如き熱心に勵まされて、殆ど崇高とも稱すべき忍耐を持続し、專心堅忍、決意遂に目的を貫徹したり、彼歴史的遺物を發掘したることの數多きや、誰人の勤勉も未だ嘗て集め得ざりし程なりき。二哩に及べる凸字彫刻は、かくしてレーヤード氏によりて世に發表せられたり。是等の貴き古蹟の拔萃は今英國博物館にあり。是等彫字の記せる所は、約三千年以前に起りたる事件を記せる聖書の記事の益々眞なるを證すること、げに不思議なり。されば、是等古蹟は殆ど新默示として世に表はれたりと謂ふべきか。レーヤード氏其著「ニネヴェの記念碑」に於て是等有名な古蹟發見の次第を語れり。此等に於て、氏の語る所は個人の企業と勤勉と精力とを吾人に示す最も興味あり最も眞實なる記述の一なりと長く人の認むる所なるべし。

コムトド・ビュッフオンの生涯も、亦吾人に忍耐勤勉の力を示し、且氏自ら言ひし「天才とは忍耐のことなり」なる言の眞なるを證するものなり。彼が博物學に於て功績の甚だ大なるにも拘はらず、ビュッフオン青年の時は才能平

凡の人と見做されたり。彼其心散漫に流れ易く、一たび得たる知識を再び思ひ出すこと甚だ遅かりき。彼元來身體弱くして勉學に堪へず、且富家に成人となりし故、安逸放縱に耽りたりと思ふ人もあらん。事實は之に反し、彼夙に逸樂を禁ずることを決心し、専ら研學と修養とに身を委ねたり。時を以て限りある財寶となす彼は、朝遅くまで臥床にありて、時間を失ふこと大なるを悟り、直ちに此惡習慣を破らんと決心したり。彼は暫時の間、此習慣を破らんと努めしも、定刻に起床すること能はざりき。是に於て僕ヨセフの助を求むることとなり、毎朝六時前に我を首尾よく起せば、其度毎に一クラウンの銀貨を與へんと約したり。最初ビュッフオン僕に喚び起されたる時は、或は氣分惡しと辯解し、或はうるさしとて怒りを示し、以て起床を拒みたり。而して其儘に目睡むや、前の命令に反して其臥床に長くあることを許したりとて叱責せらるゝのみなりき。僕は遂に必ず一クラウンを得んと決心し、ビュッフオンが或は懇願し、或は抗論し、或は直ちに解雇すべしと威嚇するにも拘はらず、幾度も幾度も強ひて主人を起さんとしたり。或る朝ビュッフオンいたく

頑固なりければ、ヨセフは極端手段を採るに決し、寢衣の下に一杯の氷冷水を注ぎたり。其効果は觀面なりき。斯かる手段を用ひて怠らざりしかば、ビュッフォン遂に朝寢の習慣に打ち勝つを得たり。彼は、其著はせる博物書の三四冊は、ヨセフに負ふものなりと言ふを常としたりき。

其生涯の四十年間、ビュッフォンは毎朝九時机に向ひて午後二時まで研學し、夕は五時より九時まで勉強たり。彼の勉強は連續的にして正確なりしかば、遂に其習慣となるに至れり。彼を傳せし者曰く、『勞作は彼の必要物なりき』と。彼の勉強は生活を愉快にするものなりき。其光榮ある生涯の終りに近づきて彼屢々曰へらく、『余は猶ほ研學の爲めに數年間を用ひ得んことを望む』と。彼は良心甚だ鋭敏な勞作者なりき。常に其最上の思想を最上の書方に表はして、讀者に與へんことを勉強たり。彼は、其文章を、修正、改竄すること屢々にして、倦むことなし。故に、其文章は殆ど完全と稱せられ得べし。其著、自然の研究は、之を改作すること十一回にも及びて、漸く満足するを得たり。此書は、彼が五十年間の思索、研究の後に出來たるなり。彼は全然事務家なりき。

万事に於て秩序あり次第あり。『秩序なき天才は其力の四分の三を失ふ』とは、彼の常に言ひし所なり。文士としての大成功は、主として其勞苦勤勉と精勵専心の結果なり。マダムネッカー曰く、『ビュッフォンの強く信ぜし所は、天才と深き注意とを一事に向けし結果なり』と云ふ事なり。彼の言ふ所に據れば、彼が其最初稿を終へたる時は、全く疲れはてたり。されど強ひて其稿を注意再査したり。其文既に殆ど完全に達したりと思ふ時も之を怠らざりき。而して此長き苦心の修正を苦痛とすることなく、快樂と感ずるに至りたりと云ふ。尙ほ一言すべきは、彼其總ての大著作を著述出版せし日は、世にも苦しき病に罹り居りし時なりしと云ふ。

文學者の生涯にして右の如く堅忍の力を示すものは多くあり、而して余の思ふ所に據れば堅忍の力を示すものとして、サーウオータースコットの生涯が最も教訓的なるべし。彼某氏の法律事務所にあり、數年間寫字生として無趣味の事務を執りたるが此爲めに勞作的性質の鍛練せられたり。晝間器械的なる仕事をなして後、夜は甚だ爽快なりき。夜は己の時間なれば、彼は

之を讀書勉學に用ふること常なりき。彼は普通の文人が多く缺乏せる確固正實の勤勉を有したりしが、彼は此習慣を以て専ら其無趣味なる事務的修練の賜とせり。寫字生として彼の得し所は一枚毎に三片なりしが、時々餘分の仕事として、二十四時間に百二十頁を寫し得て、三十志を得、此金を以て屢々端本を求めたりき。かくせずしては書物を求むること能はざりしなり。

晩年スコットは自ら事務家なることを誇り居れり、其所謂「短詩作者の僞言」に反對して天才必ずしも日々の務を怠り嫌ふべき所以なき旨を述べたり否。彼は百尺竿頭更に一步を進めて曰く「日々若干の時間を實務に用ふるは、遂にはこれ以上の別種の能力を發達せしむるものなり」と。後彼エディンバラ集議會の書記として働きたし時、其文學的作物は重もに朝餐前に書き、晝は出席して種々の記録を訂正したり。ロックハート曰く「スコットは、

半——は實際界の事務に當りて誠直に務めたり、是れ彼の生涯の最も著るき特質の一なり」と謂ひ得べし」と。生活の資は事務に依りて得べし、文章に依

りて得る勿れとは、彼が自らに定めたる行動の原則なり。或る時彼は曰へり「余は文を以て我杖となすも決して我挿木杖（丁字形の杖にて、跛者の腋下に挟みて用ふるもの）となさるべし」と定めたり。又文に依りて得たる利益は、如何に都合宜しくも、出來得る限り日々の生計には用ひざるべしと決心したり」と。

彼が時間を嚴守する風は、彼が大に苦心して修練したる習慣なり。彼にして此習慣なからんか、彼の如き多大なる文學的勤勞を爲しおぼせ得べきわけなし。彼は受取りたる手紙の返事は、其日の中に出すを習慣とせり。其返事の熟思考究を要するは此限りにあらざれど、かくの如くせずしては、滔々として彼に注ぎ來り、時としては善良なる彼に多大の苦業を與ふる大水の如き文通に答ふること能はざりしなり。毎朝五時に起き、自ら火を點ずるは彼の常習なり。丁寧に髪を理し衣を着け、六時机に坐す。机上の書類整然として並び、種々の書籍は牀上にありて彼を圍めり。而して少くとも一の愛犬は、書籍の外にありて警戒す。かくして九時より十時の間に於て、家族が朝餐に集

する時までには、彼は澤山の仕事を爲し終へるなり、彼は之を「其日の仕事の頭を破るべく充分なしたり」と言ひ居れり、スコット勤勉不撓にして且多年の間堅忍勞作せし結果として、博大なる智識を有せしにも拘はらず、自己の能力については常に甚だしく謙遜して語りたり、或る時彼は曰へり「全生涯を通じて余は我無智のために悩み苦みたり」と。

かくの如きこそ眞の穎智なれ、眞の謙虛なれ、人は眞に知るほど益々虚榮の心減ずるものなり、其大學神學部の一學生、教授の所に至りて「余は既に教育を完了したり」との故を以て、暇乞ひせしに、教授は「げに然るか、余は今我教育を始めつゝあるのみ」と答へて、賢くも彼を批難したり、生學問をなせる淺薄なる人々は、其才能を自慢することあらん、只聖者は謙遜に「自白す」我が知ると言ふ所實は何物をも知らざるなり」と。若くはニウトンの如くかく言ふ眞理の大海は渺茫として我前に横はりて、未だ毫も探検を経ず、それかくの如く然るに、余の如きは此大海の岸に貝殻を拾ふことに従事したるに過ぎざるのみ」と。

ジョン・ブ
リットン

第二流の文士の生涯も、亦等しく堅忍の力を例證するものなり、「イングラ
ンド及びウェールズの美」其他の價値ある建築學上の書を著はしたる故ジ
ョン・ブリットン氏は、ウヤルトシェアーのキングストンの一茅屋に生れ
たり、父は麵包焼業にして、麥酒製造をも兼ね、ブリットン猶ほ小兒なりし時、
父業に失敗して發狂者となれり、ブリットンは、學校教育を受くること極め
て少なく、社會の惡風を知ること甚だ多かりき、されども幸にして墮落せざ
りき、早年にして、クラークンウエルの酒家なる叔父の家に働くこととなり
其家にて彼は五年間以上、酒を瓶に入れて栓をなし、箱に收むることをなせ
り、後彼健康を損じければ、叔父は彼の衣囊ポッケットの中に僅に二ギニアの金を與へ
て家を出て、世を漂浪するに任せたり、此二ギニアこそ、實に彼が五ヶ年の勤
勞の結果なりしなり、後の七年間に於て、彼は幾多人生の轉變と苦難とに遭
遇しぬ、されども、彼は其自叙傳に於て曰く、「余の一週間十八片ペンスの宿料を以て、
貧困卑賤なる下宿をなせしが、此時余は勉學に耽りたり、冬の夜は火を得る
能はざりしを以て、櫛中に入りて讀書したること屢々あり」と、パスまで徒歩

にて旅行し、其地にて、穴藏の番人となりしが、幾許もなくして殆ど懐中一錢の貯もなく、靴も穿たず、襦衣も着けずに再び首府に歸りたり、かくて倫敦の某酒家の穴藏番人となるを得たり、彼の職務は朝の七時より夜の十一時まで、穴藏の中にありて番することなりき、彼暗中に閉ぢ込められ、且過激の勞働に服せしため健康を損じたり、次に彼は一週十五志を以て辯護士に書記として傭はれたり、是れ彼が數分の暇を以て書法を熱心學修したるに依りてなり、彼此家にある間、餘暇は重もに書店を巡覽するに用ひたり、彼書を購ふ能はざりしかば、書店を廻りて少しづつ書を讀み、以て片々の知識を得たるなり、次に彼は一週二十志の俸給を以て他の事務所に轉じたり、而して其勉學と讀書とは、依然として變はることなし、廿八歳に及びて、彼一書を著せり、此書『ビザロの企業的冒險』と題して出版せられたり、是より死するまで約五十五年間、ブリットンは文士を職として勤勞したり、其著書八十七に及ぶ、中最も重要なるは『英國寺院の古跡』と題し、十四卷より成る、眞に大著述と云ふべく、其れ自らデヨン・ブリットンの不屈なる勤勞の好記念碑なり。

風景園丁(ランドスケープ・ガードナー)を直譯す、樹木を栽培修理し、庭園の風景を飾る植木屋(ラウドン)亦ブリットンに似たる性格の人、非常なる勞作的精力を有せり、エディンバラ附近の一農夫の子にして早く勞働に従事したり、彼畫圖を造り風景のスケッチを描くことに熟練せしかば、父は彼を風景園丁に仕立てんとして、其徒弟としたり、彼徒弟たりし間、一週に二度徹夜して勉學したり、而も晝の中は他の勞働者よりも能く働きたり、其夜間の勉學に、彼は佛蘭西語を學び、未だ十八歳ならずして『百科全書』のために佛文アベラード傳を翻譯したり、彼の進歩向上の心の盛なる、其廿歳にして英倫に於て一園丁として働き居る時次の如く、其手帳に記載したる程なりき、曰く、『余は今や廿歳なり、多分我生涯の三分の一は過ぎしならん、然るに余世人の利益となるべき何物をかなしたるや』と、廿歳の青年にして此反省ある、寔に稀數と謂ふべきなり、佛語の次に獨逸語を學び始めしが、忽ちにして之に通ずるを得たり、蘇格蘭の改善を農業の術に紹介せんため、一大田園を得て、間もなく多額の收入を得るに至りたり、戰爭の終りに於て、歐洲大陸は廣く

開放せられたれば、彼は他國に於ける種藝農業の方式を研究せんがため、外國に旅行したり。彼は再び其旅行を繰返し、其結果は百科全書となりて現はれたり。此書はかゝる書中の最も名高きものゝ一にして、世にも稀なる多大の勤勉勞作に依りて集めたる有益なる事柄を記しあること甚だ多し。

サミュエル・ドリュールの生涯も、亦前述の人々に譲らず著るきものなり。其父はコーンウォールのセントオーステル寺領の勞働者にして、劇しき勞働に従事せる人なりしも、其二子を近隣の貧民學校に出したり。二子の中、兄はジフベットと云ひ、學を好みて課業に進歩せしが、弟なるサミュエルは、愚鈍にして惡戯を好み、學校を休むを以て有名なりき。八歳の頃手工の勞働に従事することゝなり、錫坑に於て錫を淘汰する小僧となり、一日一片^{ペン}を得たり。十歳にして靴工の徒弟となりしが、此家にありては大に艱苦を受けたり。當時の生活は寔に彼の常に言ひしが如く『鋤の下の藎の如く』なりしなり。彼は屢々家を飛び出して海賊にてもならんかと思ひたり。彼は年と共に放逸となりしが如し、果樹園に入りて果物を盗む時、彼は常に惡童の首領なりき。長

じては好んで密輸出入のことをなせり。十七歳の頃、其徒弟の期限終らざるに、軍艦に入らんと目的を以て家を逃げ出したり。されど夜間枯野に眠りて少しく其身を冷やし、爲めに其職に戻りたりき。

次にドリュールはブリムス附近に移轉して、靴製造業を営みたり。時に彼カウサンドに於て杖打遊戲に勝ちて褒賞を得たり。此遊戲は彼の熟練せる所なりき。此處に住める時、彼は密輸出入のことに關係して危く其命を失はんとせり。彼が此惡事に携はりたるは、半は冒險を好む心より、半は其給料一週^{シリング}入志に過ぎざるより利益を得んとの心よりなりき。一夜クラフトホールに一報傳はりぬ、曰く一密輸入船沖中にありて其積荷を陸揚げせんとすと。村の男子の殆ど總ては、密輸出入者なりしかば、之を聞きて直ちに海岸に馳せ出でたり。一隊は岩上に留まりて合圖をなし、陸揚げされたる貨物を處理せんとし、一隊は端艇に乗りて船に進みぬ。ドリュールは後者に屬したり。夜は暗澹として寸前を辨じ難し、貨物は未だ幾許も陸揚げせられず、時に暴風起りて、海は澎湃の怒濤を以て荒れ立ちぬ。されども端艇の人は尙ほ屈せずして

遙か沖合にある密輸入船と海岸との間を數回往來したり。ドリュューが乗れる端艇中の一人、風に帽子をさらはれしかば、之を取らんとして舟を覆したり。三人は直ちに溺れぬ、他の人々は暫時舟にとりつき居たれども、舟は沖の方へ漂ひ出づるを以て、舟を棄て、泳ぎ始めたり。彼等は海岸より二哩の沖にあり、暗澹たる夜は更に暗し。ドリュューは、一二の人と共に三時間も水中にありし後、辛うじて濱邊に近き一岩礁に達し、寒さに感覺を失ひつゝも、朝まで其處に止まれり。朝になりて人々彼等を見出し、半死半生のまゝ連れ歸れり。かくて陸揚げしたるばかりの荷物の中より、一樽のブランデーを取り出し、斧を以て栓を打ちぬき、蘇生者に各々一杯を進めたり。暫時にして、ドリュューは歩行し得るに至り、其住居まで二哩の間、深雪の中を歸りたり。

斯の如きは、實にドリュューが生涯の初期なりき。誰か彼を以て有望なる青年と思ひしや、而も此無頼漢、果樹園竊盜、靴職、工、杖打、遊戯者、密輸出入者なりし。ドリュューこそ、青年時代の放逸を、悔め、福音の使徒として、良書の著者として、其名を顯はすに至りしなれ。幸福にも彼の特質なる強き精力は、健全なる

方向へ向けらるゝに至り、彼をして以前惡事に於て著はれしめしが如く、善事に於て著はれしめたりき。彼が改心の遲きに過ぎざりしは、幸と謂ふべきなり。彼の父は再び彼をセントアウステルに伴ひ歸り、靴を製造する雇人となしたり。後暫くにして、彼改心して眞面目となりしが、是れ其辛く死を免れたることによりて反省する所あり、且ウエスレヤン、メソジスト派所謂メンヂスト派は有名なる宗教家ウエスレーの建設する所なる故此稱ありの一牧師博士アダムクラーク氏の力ある説教に依りしなり。時に其兄弟死せしかば、彼感益々深くして益々眞面目となり、以來全く別人の如くなりたり。彼は多年放浪の生活に讀み書きを全く忘れたれば、再び修學を始めた。後七年間を経しも、其字拙惡にして、一友之を、インクに浸りたる蜘蛛が紙上を匍ひ廻りたる跡の如しと評せり。ドリュュー後年當時の自分について語りて曰く、「當時余は讀めば讀む程、我無學を感じたり、而して我無學を感じずる程、無學に打ち勝たんとする我精力の強くなるを感じたり。今や暇の時間は皆書を読むに用ひらるゝに至りぬ。生計のため、手工をなさざるべからざる

りしを以て、讀書の時間は殆ど無き程なりき。されば此不都合を破らんため、食事の間前に書物を置き、一食毎に五六頁を読みたり。是れ私の習慣なりき』と。彼ロツクの『悟性論』を読み始めて其心に哲學的變化を得るに至りたり。彼曰く『此書は夢死より我を醒し、我をして其時まで抱き居りし卑小の見識を捨てんとの決心を起さしめたり』と。

ドリュュー僅に數志の資本を以て靴製造業を創めたりしが、彼のひと爲り甚だ確實なりしかば、近隣の水車屋、金を貸さんと申出したり。ドリュュー之を受け、勉強して業に成功し、一年の終りには借金を返済したり。彼は『人の世話にならざるべし』との決心を以て、出發しけるが、艱難、勞苦の中に於ても、此決心を持続したり。彼は負債を恐れて、屢々晚餐を食はずして臥したり。彼の野心は勤儉力行に依りて獨立を得んとすることなりき。而して彼は漸次之に成功するに至りたり。不斷の勤勞の間に於て、彼は天文歴史、哲學等を學びて、勤勉精勵心を修養せんと努めたり。彼は好んで哲學の研究をなしぬ。是れ重もに哲學の研究は天文歴史の研究よりも引用の書を要すること少なきに

よりてなりき。彼は曰ひぬ『そは荆棘多き路なりと見えぬ、さりながら余は此路に入らんと決心しぬ。故に余は此路を辿り始めたり』と。

彼靴屋として勤勞し、哲學を勤勉研鑽せる外に、又地方傳道師となり、小會長共にメソジスト教會の役の名となりて勉めたり。彼は政治に熱心なる趣味を有し、村の政治家等、村人にて好んで政治を談ずる人は、好んで彼の家に集まりたり。彼等彼の處に來らざる時は自ら彼等を訪うて政治を談じたり。之が爲め彼の時間は穴に蠶食せられ、爲めに彼は晝間失ひたる時間を回復せんがため、屢々真夜中まで働くの已むを得ざるに至れり。彼の政治狂は今や全村の評判となるに至りぬ。一夜匆忙として靴の裏皮を打ち居りしに、小兒あり、店の火を見て、戸の鍵穴に口を寄せ、高聲に叫んで曰く『靴屋よ、靴屋よ、夜は働き晝は飛び廻れ』と。ドリュュー後此事を一友に語りしに、友問ひて曰く『君は小兒の後を逐ひて撲たざりしか』と。彼は答へぬ『否とよ、否とよ、縦ひ短銃我耳邊にて發砲さるゝとも、余はあれ程には慌て驚かざりしならん。余は小兒の言を聞きて、直ちに手に持つ革をも、踵をも落したり。而して獨語した

り、眞なり、眞なり、されど余は汝にかくは再び言はせざるぞと、小兒の叫は余に取りて寔に神の聲の如くなりき。寔に一生の金言となりき。余は此事に依りて、今日の仕事を明日に残す勿れ、働くべき時に遊ぶ勿れと云ふことを學びたり」と。

此時よりドリュエーは政治を談ずるを止め、業務に専一となり、少許の餘暇には讀書し勉強したり。彼は休息の時間に讀書勉強をなすことは屢々ありたれど、業務の時間には決して之をなさざりき。彼結婚して後、亞米利加に移住せんと志せしが、尙ほ其業務に留まりたり。彼の文學的趨向は、最初は詩作に向へり、今残れる詩の斷片によりて見れば、彼の『靈魂の非物質と不滅』とに關する考究は、其源を是等の詩的文學に發するが如し。彼の書齋は臺所にして、妻の風櫃を以て机となし、小供等の泣聲と子守遊びとのうるさき中にて文を草したり。時にベーンの『理性の時代』と云ふ書現はれ、讀書社會の感興を引き起せしが、ドリュエーは此書の駁論のために一小冊を著述出版せり。ドリュエー、後常に曰へらく、我をして著述家たらしめしものは『理性の時代』なり。

と暫くにして彼は幾多の小冊子を續々著作出版したり。後數年、彼の大著『人間靈魂の非物質及び其不滅の論』世に出でしが、時に彼は尙ほ靴屋として働きて居たり。此著は二十磅にて書肆に賣りたるものなるが、當時彼の位置としては甚だしき高價なりしなり。本書は幾版を重ね、今も人々の賞讃する所なり。

若き著述家は、其著書の成功に誇ること常なりと雖も、ドリュエーは決して此態を學ばざりき。のみならず、後年文士として世に著名となりし後も、彼が門前の往來を掃き居り、又其傭人等を助けて、冬期用の石炭を運び居るは、人々の常に見る所なりき。又彼は數年の間、文學を生活のための職業と見做すこと能はざりき。彼の第一の配慮は商業によりて正當なる生計の資を得んことなりき。次に時間の剩餘を彼の所謂『文學的成功の富圖』に用ひんことを配慮せしなり。譯者白す、彼が著作のことを以て文學的成功の富圖と名けたるは、文學上の成功は、凡て僥倖によると思惟せしに依るならん。されば、彼は後遂に其身を全く文學に委ぬるに至り、殊にウエスレー派と關係して同派

の雑誌の一を主裁し、其主要なる著書數部の出版を管理したり。彼は又雑誌『宗教評論』に筆を執り、其生地なるコーンウォール州の歴史及び幾多の他の著作を編纂出版したり。此コーンウォール州の歴史は、價値あるものなり。晩年に及びて、彼自身について語りて曰く、『社會最賤の地位より起りて、余は正直なる勤勉と節儉と我道徳的性格に對する高き認識とによりて、我家族を尊敬に價する地位に上げんと一生中努力したり。神の攝理は、我努力の上に微笑みぬ。而して我祈願に冠するに成功を以てしぬ』と。

故ジョセフ・ヒュームの生涯は、ドリユーのそれとは甚だ異なり。されど堅忍の精神を以て勞作したることは相同じ。ヒュームは、其材、凡庸なれども、大なる勤勉と疑ふべからざる正醇の希望とを有したり。其生涯の標語は『堅忍』の二字なりき。而してげに見事に是に依りて活動せり。父はヒュームの小兒なる時死せしかば、母はモントローズに於て一小店を開き、家族を支へ、子等を良く育てんがために勞苦したり。彼女はジョセフを一外科醫の書生となし、醫師に仕立てんとせり。ジョセフ長じて開業免許狀を得、船中の外科醫と

して幾度か印度に航海し、後東印度商會の志願兵となりたり。彼の勤勉にして節制を守ること及ぶものなく、上官の信任を得たり。彼等は彼を以て職分の遂行をなし得る有爲の青年となし、次第に彼を昇進せしめたり。一千八百〇三年、マラーッタの戰に於て、彼はボーエル將軍麾下の一師團にありしが、其通譯死したるを以て、既に土語を學びて習得し居たる彼は、其後任に補せられたり。次に彼は醫療部の長に任ぜられしが、これのみにては彼の勞作的精力に餘りありと見え、拂金部長と郵便部長とを兼ねて充分に職責を盡くしたり。尙ほ彼は兵站部の事務に當ることとなり、軍隊に都合よく且己に利しあるやう之を務めたり。彼不退轉の勤勞を續くること十年間、有爲の材を以て英國に歸りたり。其歸朝第一の仕事の^一は、其一族の貧者に^{給與する所}ありしことなり。

英國と印度との間を航行せる間、其少許の餘暇を、孜孜として航海術の研究に用ふるが彼の常なりき。幾年の後には著しく有用となりたり。一千八百廿五年、一小帆船に乗じて、倫敦よりレースに至る途中、船テームス河口を出づるか出てざるに、突然激風起りて、船は航路を離れ、暗濤たる夜中のことゝて、グッドウキンの淺

減り乗り換へたり、慌てふためきたる船長は、適當なる指揮をなす能はざるべく見えぬ。されば若し乗客の一人が突如として自ら指揮の任に當り、危険の續ける間は、自ら舵をとりて船の進行を計らざりしならば、船は全く難破せしならん。かくして船は難破を免れたり、而して此一乗客こそヒューム氏なりしなれ。

さりながらジョセフ・ヒュームは、怠惰の中に其勤勞の結果を費す人にあらず。勞作と職務とは其安慰、幸福のために必要缺くべからざるものとなりぬ。自國の實狀を充分知らんがため、彼は當時多少に拘はらず製造工業に名ある國中の都會を歴訪したり、後彼は海外の知識を得んがため、外國に漫遊せり。歸りて後一千八百十二年國會に入り、中途にて暫く退きしことあるも、前後通じて約三十四年間議員を續けたりき。其筆記にある最初の演説は、公共教育に關してなりき。其長き名譽ある生涯を通じて、彼は此公共教育の問題其他人民の狀態を向上改善するに足る總ての問題——例へば刑法改革、貯蓄銀行、自由貿易、經濟及び節減派遣擴張等の諸方案——に強く且熱心なる趣味を有しき。是等は皆彼の倦まず撓まず進めたる所なりき。彼は如何なる問題を試みるも、全力を盡くして之に當りたり。彼は雄辯家にあらざりき。

されども彼の言ふ所は、正直、單純、精確なる人の唇より出でしものと信ぜられたり。シャフツベリーの言ひけん如く、若し嘲笑を以て眞理を判斷し得べしとせば、ジョセフ・ヒュームは能く此判斷に立つものなり。彼の如く人に笑はれたる者はなし。されど彼は不斷に立ちぬ。彼の場所に「過またず立ちぬ。部分的には彼の破れたること常なりき。されど彼の及ぼす勢力は手應へありき。許多の重要な財政の改革は、採決の結果の全く彼に反對せる時すらもなされたり。彼が實行せし辛勞の大なること非常なるものあり。彼は午前六時に起き書簡を認め、議會のため書類を整理し、次に食事を済まして用務ある人を引見す。時としては其人數一朝に二十人にも及ぶことあり。彼議會に出席せざること殆どなく、討論翌日の午前二時三時に及ぶも、彼は退席すること殆どなし。之を要するに、一週又一週、一年又一年、幾多事務の間に立ちて、長き時期の間勤勞し、——採決に破れ、負け、笑はれ、多くの場合に殆ど孤立し、——其性情を亂さず、精力を弛めず、志望を落さずして、勇氣沮喪の場合にも確く堅忍を持し、其方案の大部分が喝采を以て採決せられしを見しは、人間

堅忍の力について傳記が示さん中の最も著しき例證なりと謂はざるべからず。